

## 三〇パーセントの神

神野麻郎

人の願望は果てしない。

ここに、変わった能力をもつ一柱の神がいる。「人」でなく「神」である。何かの拍子でこの世に現れ出たのだが、神デビューしたばかりで、とある道のかたわらの目立たぬ小さな祠ほくらに、祠のサイズに合わせて小さく身体を縮めながら一柱で住んでいる。祠はほとんど雑草に埋没しているので、道を行き来する人々もまるで気づかないか、気づいても小さく貧相なので無視して通り過ぎる。そんなふうでも神のほうは無邪気な好奇心であたりを見回し、そして自分の与えられた能力を試したくてたまらない。でも立ち止まって手を合わせてくれる人は、今のところ皆無である。

その神の名は、「スサ神」。「スサ」という名前は、そう、あの「古事記」や「日本書紀」という古書に出てくる由緒正しき神、スサノオノミコトに由来する。どうやらスサ神は、遠く遠くさかのぼればスサノオノミコトの系譜につながるらしい。もちろん神々の系譜などは人間界の家系図以上に造作・加上・捏造が多いしろものなのだが、ともかくスサ神がものごころついたころ、自らの出自についてすでに頭の中にそのようにインプットされていたのである。

さてスサ神は、この世への神デビューはなんとか果たしたものの、先のようなありさままで毎日暇で暇でしかたがない。でも少年の前向きな素直さで、暇がある間にこの世の中というものを勉強しておこうというつもりで、雑草越しに前を通り過ぎる人々を観察するのに余念がない。スサ神が鎮座している前の道は、近くに電車の駅があるので朝夕に人通りが多い。またそばに林と川があるので、散歩をする人たちも少なくない。ただ、散歩の人に連れられた犬がしばしば背の低い祠に向けてオシッコをひっかけてくるのには閉口する。そんな時スサ神は「あわーっ」と思わず大声を上げ、裾を持ち上げて黄色いシャワーから逃れようとするのだが、もちろん神の声だから人や犬の耳には聞こえない。

スサ神は、熱心な観察によって、人間という生き物はあらゆる生物の中でかなり風変わりなものだということも早くも理解した。神界の学校でいちおうそのように習ってはいたのだが、実地にわかった。ともかく人はじつに多様多彩である。顔つき身体つき服装や髪型の外見からしてそうであるし、性格もそうである。そして、これも学校でいちおう習ってはいたのだが、その人間たちが道や建物や乗り物などと、自分たちの都合のいいようにこの世界を作り変え、わがもの顔で暮らしていることもよくわかった。さてそんな人間に、ひよっこの

神たる自分はどうかわつたらよいのか。

そんなふうにあれこれ思いめぐらしながら人間観察を続け、一方では暇をかこつていたスサ神だが、ある雨の降りだしそうなどんより曇つた朝、珍しいことがあつた。スサ神が起き抜けの寝ぼけ眼でいたところ——神ももちろん適当に休息するのである——、赤いランドセルを背負つた小さな女の子が前に立ち止まり、祠に向かつて手を合わせたのである。

「アタシの頭がもつとよくなりますように。勉強ができるようになりますように」

心の中でそうつぶやきながら目には涙をたたえている。スサ神は神力ですばやく女の子の頭の中のあらましを読みとつた。日ごろ両親から学校の成績のことをうるさく言われるのが現在の最大の苦痛らしい。テストの成績が悪いと、父親に「おまえはバカだ」となじられて頭をぶたれることもあり、母親からも「努力が足りない」とぐじぐじ責められる。スサ神は女の子をかわいそうに思つて、祠の奥でくくりとうなずいた。それに、初めての「信者」だから大切にしなければ。自分の小祠を自然に神の住まいだと認めてくれたことにも心から感謝したい。

一週間ほどたつたよく晴れた朝、またその女の子が前に立つて今度は明るい顔で手を合わせた。テストでふだんよりずつといい点数がとれた、それで両親にもほめられた、らしい。そして女の子は、殊勝にもお札にと祠の前においしそうなミカンを一つ置いていつてくれた。スサ神は嬉しくなつた。女の子を笑顔にしたわけだし、それに自分の能力も一つ証明できたわけだから。

さてこのあたりで、このスサ神のもつ特殊能力というのを明らかにしておこう。神が人の願いを叶えてやる、というのは大昔からのこの世の慣行だが、もちろん神々にはそれぞれ専門や得手不得手、力の強弱はあるし、願いを叶えるために取る手段、方法もさまざまだ。じつはスサ神は、人の持つていろいろな力を、現状より三〇パーセント増やすことができるというすぐれた能力を持つていたのである。先の女の子でいえば、スサ神は願いに応じて女の子の学力を三〇パーセント引き上げてやつた。早い話が——パーセントの計算法をめぐつてややこしい話をしないとすれば——、七〇点しかとれなかつた算数のテストが九一点になつたのである。ただし、上がった女の子の学力が、ほんの一時期で元にもどつてしまうのか、それともけつこうな期間、あるいはずうつと持続するのか、といったことについてはスサ神自身にもよくわからない。なにしろ神デビューしたばかりなのだから。

祠の前に女の子が置いていつてくれたのはオレンジ色のミカン一つ。でも意外にもこれが次の「信者」を誘つてくれた。ミカンのおかげで、青草に埋もれているような祠がいくらか祠として目立ったのだ。夕方、通勤帰りの若い女が立ち止まって手を合わせ、お辞儀をした。

「もつときれいになりますように。そして好きな彼が私をふり向いてくれますように」

スサ神はまじまじと彼女を見つめた。いや十分美しいではないか、ちよつと欲深いなと思

ったが、自分の能力を試すためにその願いも叶えてやることにした。

十日ほどたって、やはり夕方、通勤帰りの彼女が立ち止まった。嬉しそうに微笑んで手を合わせている。

「彼とデートできました。そして彼が告白してくれました。神様、ありがとうございます」  
それを聞いてスサ神はまたいい気分になった。もとがよかった上にさらに三〇パーセントも美しさを増した女は行き交う人ごとに振りかえるほど輝いていて、スサ神も祠の奥からつい見とれてしまった。

女は、お札にと、しばらくしゃがんで華奢な白い手で祠のまわりのゴミを拾い、はびこる雑草を抜いてくれた。それでまたいちだんと祠が目立つようになり、通りすがりに拜んでいく人がぼつぼつと現れた。スサ神は少し忙しくなったが、信者をふやす都合上、できるだけ人々の願いを聞くように努めた。世に出ればすべからく人のために尽くすべし、して信者を増やし教勢を拡大すべし、とスサ神は、神界から地上に送りこまれてくる際に大神たちに訓示されていたのだ。

けれども、参拝者たちの願いに応えようと励んでいるうちには失敗もやらかした。登校途中の眼鏡をかけた肥満気味の男子中学生が悩ましい顔で、

「ぼくは小さい時から足が遅いのが悩みです。いつもビリつけつなので運動会は大っきらいです。どうか走るのが速くなりますように」と願うのでお安い御用とすぐ叶えてやった。

ところがその日の昼過ぎになって、その中学校の方の上空がやたらと騒がしい。気になってそつとのぞきに行ってみると、なんと彼がいきなり一〇〇メートルを一〇秒台で疾風のように駆け抜け、大騒ぎになっていたのだ。事態を知ってスサ神は蒼ざめた。あわててその男の子に近づき、三〇パーセントのところを一〇パーセントに減らした。というのも、その男の子がそのまま成長すれば一〇〇メートル走でかんたんに世界記録を破ってしまうかもしれない。そんな人類の歴史を一部でも改変するようなしわざは、神々の世界で厳に禁じられているからだ。スサ神は、あやうく禁を侵してたちまちもとの世界に回収され、永遠に目の見られない暗黒の檻に入れられるところだったかもしれないのだ。

運動場で、もう一度彼が平凡な、でもいつもよりはかなり速いタイムで一〇〇メートルを走りきったとき、スサ神は胸をなでおろしながら、「くわばら、くわばら」と古語を吐いた。それ以来スサ神は再びそんな失策はせぬよう、その願いの種類や性質に応じて増やすパーセンテージを調節することにした。

それからまた、人の欲深すぎる願いや途方もない願いは聞き入れないことにした。「商売が繁盛しますように」というのはまともだが、「どうぞ宝くじの一等を当ててください」、「パチンコで百万円かせげるように」、「株で一億円儲けたい」などというのは虫がよすぎる。「女優になれますように」というのはけっこうだが、若い男が「女を百人だまして金持ちになれるように」と言ってきたなどは願い下げだ。

さらにまた、スサ神は多くの人の願いを聞いているうちにしばしば自分の能力の限界も感じた。学力や美の力や走力を増したり健康を増進したりすることはできても、たとえば「自分の性格を変えたい」、「友だちとの関係を修復したい」、「世の中が平和でありますように」などの願いにはたとえ願い自体がまつようなものであっても、自分の力では対処しようがないのだ。あまり言ってはこないが、「交通安全」「商売繁盛」「豊作豊漁」などもじつは力に余る。それらの願いは、悪いけれどもこつそりスルーするしかなかった。

それでも十人、二十人とまじめに願いを聞き、叶えてやっているうちに、スサ神参拝の効能はしだいに口コミで広がり、駅周辺の地域で評判になってきた。三カ月ほどたつうちに、時間帯によつては、新しく開店したドーナツ店や人気のラーメン店の前のように祠の前行列ができるようになった。また、祠の前についての間にか棚が設けられ、そこに「信者」たちが思い思いに賽銭や供物を置いていき、周囲の枯れ草も刈られたのでミニ社らしくなった。

そして沿道に桜の花もほころび始めたある日、まだ夜明け前にスサ神は叩き起こされた。轟音を上げてバイクを乗りつけてきた四人組の若者が、祠の前で大声でふざけはじめた。

「ここや、ここやで。拝んでみようや」

「あかんで、神様なんて。迷信と同じやんか」

「こんなちっこい祠やしなあ、中における神様もしよばいで」

「まあ、ゲームみたいなもんや。アソビ、アソビ」

誰かが乱暴に放った十円玉が祠に当たってカランと音をたてた。その態度の悪さと寝起きの不機嫌さで、スサ神は彼らのいい気な願いをすべて却下した。でも彼らが立ち去った後も、左手から右手から、中高生くらいの男女が続々とやって来る。みなスマホを手にしている。どうやらスサ神に拝めば願いが叶うとSNSに祠の写真と地図付きの記事が出て、あつという間に拡散したらしい。見る間に行列が道に沿って左右にできた。

スサ神はびっくりした。突然見知らぬ大勢に攻め寄せられ、どうなるものかと一瞬ひるんだ。でもすぐ、これは信者を一気に広げる大きなチャンスだと思いなおした。居ずまいを正して一々の願いを聞きにかかり、意に沿うもの、能力の及ぶものは叶えてやった。願いは若者らしく、自分自身の容姿や能力、恋愛友人関係、試験関係および将来についてのものが多かった。願いを叶えてやる時、祠の内からあの昔のウルトラマンのように両腕をクロスして右手から信者の頭や身体に力のエネルギーを注ぎ入れてやるのがスサ神の流儀だ。そのエネルギーはスサ神にはきれいな虹色の光の波動として見えるのだが、人の目には見ええない。ただ人は、その清浄なエネルギーを脳や身体の中に受け取ると、美容院や温泉に行った後のように爽快な気分になるはずだ。だから拝んで願いが聞き入れられた者はさっぱりした笑顔になって帰っていく。

朝の登校・通勤タイムが過ぎると「客足」は減ったが、でもその夕方は朝よりも長い行列

ができた。願いを聞き入れて力を付与するのには、もちろん神のほうも相当の体力、エネルギーを使う。深夜によく人影が絶えると、スサ神はやつとゴールにたどり着いたマラソンランナーみたいに、もうへとへとになって祠の奥に倒れこんだ。

だが次の日もその次の日も、早朝から信者たちは長い列をなした。そして気づくといつの間にか、みずぼらしい石の祠が屋根付きの木製のお堂で覆われていた。これで雨風を防げるのはありがたい。さらにその正面には小ぶりだが鈴の付いた錦の紐が垂れ下がり、前の棚には賽銭箱やおみくじの小箱まで乗っているではないか。中古品の寄せ集めのようなあつたが。

人気は続いた。週日をようやくのいで、やれやれ明日は休めるなど思っていると、休日には地元の人々ばかりか、遠い町からも車やバイクや自転車がたくさん押し寄せてきた。あれよあれよと見る間に、祠の前のそう広くはない道路は渋滞し、交通整理に警官が出てくるわ、人ごみをあてこんで屋台の車まで出張してくるわの騒ぎになった。降ってわいたようになにぎわいに、地元のケーブルテレビ局が取材に来て土地の郷土史家にインタビューしていたが、マイクを向けられた古老は、

「そうですなあ、こんなところには最近までお社はなかったはずですがなあ。町史や古い地誌なども調べてみましたが、どうも見当たらないので……。いや、もともとあつたのかもしれないませんなあ、私も近ごろはすっかりぼけてしもうて」と、禿頭を撫でながらしりのないことを答えていた。バイクで疾走する者がいる、爆竹を鳴らす者がいる。時ならず起こった騒音に腹を立てた近所の住民が怒鳴りこんできて、群衆の一部と口論になった。警察や町内自治会が、「近所迷惑になるので静粛に」と大書したチラシを社のそばやら周辺の電柱やらにべたべたと貼りめぐらせたが、あまり効果はなかった。

そうして一週間ほど祭りのような喧噪が続いた。もう参拝者は真夜中にもやって来る。ほとんど休みなく働き続けたはてに、スサ神はどうとう過労でぶつ倒れた。いちばん初めの少女から数えて、通算三七一六人目に応対していたところだった。ぐるぐる目が回って倒れ、目も見えず耳も聞こえなくなり、ひたすら黒闇の世界に落下した。

そのまままる三日間ほどは何もせずに寝ていたのだが、夜中にちよつとした事件が起きた。激しくつつかれるのでしかたなく目を覚ますと、目の前に小柄で白髪白鬚の、ちよつと貧相な神が怖い顔つきをして立っていた。口角泡を飛ばしながら何やら神語でぐじやぐじゅぐじやとしきりに怒鳴っているが、聞き取れないほどの小さな声だ。その神語を人語に直すところなる。

「ワシはこの町に昔からいる○○神だ。おまえは駆け出しの新参者のくせに、どうしてたくさんワシの信者を奪うのか。許しがたい。分際をわきましろ。このあたりを統括なさっている、隣の市にまします○○大神様に訴えたら、大神様も憂慮せられていた。だからこうしてワシを遣わしておまえに意見するのだ」

スサ神は〇〇神の小ぶりな社が三百メートルほど離れた橋のたもとにあることを知っていた。そして、〇〇神が商売繁盛に加えて、恋愛成就、入試合格などを看板に掲げていることも。だから、若者の客たちをたくさん横取りしたと怒っているのだとわかった。

〇〇神は見るからに老いさらばえていて、もう信者の願いを叶える力などちつともなさそうな感じだ。そしてその剣幕も怖くはなかった。でもスサ神は〇〇神に譲歩し、詫びた。先輩の顔を立てたかたちになったが、ほんとうの理由は、これからもあんなに大勢に押しかけられてはいくら自分が若く元気だといっても身がもたないし、また一々の願いを聞く仕事もいい加減になってしまおうと悟ったからだ。

その日からスサ神は休業した。といって、参拝者が来るのを拒めるわけではなく、相変わらず長蛇の列が連日できたが、スサ神は悪いとは思いつつ祠の中で背を向け耳をふさいでいた。でも体力が回復してくると長時間ただぼうっと坐っているのも窮屈、退屈、非生産的、そこで思い立ち、この機会をポジティブにとらえ、かねてから思っていた遊行の旅に出ようと決心した。社はしばらく留守にして、(宗旨はちがうが)あの「華厳経」というお経に出てくる善財童子のように、先輩諸神を次々に訪ね、虚心にそのふるまいに学び、言葉を拝聴するのだ。それに加えて、文武両道、できればこの機会に身体もしっかり鍛えてきたい。そうして神としてもっとグレードアップしたい。寝食に不自由して危険もともなう遊行は苦しいだろうが、何でも若いころにする苦労は将来のためになるだろう。神界でも若い神の修行の旅は奨励されている。

たっぷり寝て疲れもとれたスサ神は勇躍祠から飛び上がった。まだ仮免許にしてもいちおう神身分なので、スサ神は姿を隠して飛行ができる。祠に合わせて小さく縮めていた身体も上空で伸びをするともとの大きさに戻って清々した。まずは古い大社もある隣の市あたりに行ってみようか……。

さて、それからのスサ神の遊行の旅は……でも、その諸神歴訪を一々記せばあの善財童子の話のようにやたらと長くなってしまおう。それは避けよう。ここはかいつまんで。

いきなりだが、スサ神がタカのように、あるいは昔の久米の仙人のようにして南方に飛んだ時には、とある大川の神とその上流の山の神との間で長い間続いている境界争い、水争いに運悪く巻き込まれてしまった。スサ神は大川の神の眷属けんぞくが率いる討伐隊に加えられ、川筋を遡上して山の神側を攻撃したのだが、山の神は雷神たちを使って防ぎ、さらに毒気を含む大氷雨を降らし、スサ神は動けなくなってあえなく捕えられてしまった。厳しい尋問を受けた時、スサ神は自失してしまい、氷雨に打たれたせいばかりでなくわなわなと震えた。自身でも意外な反応で、情けない、これが己の正体かと焦った。山の神や取り巻きの眷属たちはスサ神の名前を聞き出すと、「あの高天原で大暴れをやらかし、出雲の国ではヤマタノオロチを退治したスサノオノミコトの後裔にしては、あまりにひ弱すぎるのう」と手を叩き足を鳴らして大嗤いした。情けなさと屈辱で消え入りそうになったその時、耳に入った始祖の名

前が身体の深いところで反応したか、意図せずスサ神の中に急にむくむくとデスパレートな力が満ちた。たやすくいましめを断ち切り、狂ったように敵に襲いかかって蹴散らし、社を無残に破壊した。しかしいい気になって暴れ回っているうちに敵の雷神のイナズマ攻撃を受け、背中を焼かれてしまい、死に瀕した。

なんとかそこから逃れ出、ふらふらと北の方に浮遊した時、滝の神に拾われ救われたのは幸運だった。大滝の水にあたると、傷はほんの数日で跡形もなく癒えた。スサ神はそれからもしばらくその清浄の地に留まらせてもらい、他の神々とともに、轟音をあげて数十メートル落下する大滝の下で滝行をした。修行の合間、スサ神は滝の神にそこに到った事の次第を話し、

「自分は心弱く、しかもいったん狂えばむやみに暴れ回る、とるにたらない者です。こんなではまるで神失格です。どうすればよいのかわかりません」と嘆いた。滝の神は、

「まあ焦らずともよい。まだ若いのじゃから。己の弱さを知る、強さはそこから生まれようと静かに論じた。

深山にもかかわらず、そこは山伏など熱心な信者の参拝が絶えなかった。滝の神は常々、「神たるものの役目は、人間の心身にたまった罪、ケガレを洗い清めてやること」と水の功德を説いた。スサ神がなんとか心を立て直してそこを去る時には、神は滝の上にもごとな龍の姿を現して見送ってくれた。

その後、東の方の大きな都市に遊んだ時には、人気の大社で初詣の盛大な賑わいを経験した。押し寄せる人波に対応するため、神殿にすらっと大神はじめ摂社末社の神々が居並んだその末端にスサ神も列なつた。境内を埋め尽くす群衆の熱気に圧倒されながら、スサ神は「この国は正月の初めだけ昔ながらに神の国になる」と以前に聞いたことを合点した。いかにも商売人らしい風采の大神は、集まった莫大な賽銭を満足そうに眺めながらスサ神に、「神業も商売、最古のサービスマスターのつじや。とくに供物賽銭の多き者たちの願いをよく聞き届けてやりなさい。すればまた供物賽銭が増えるという道理。この時代、神もマーケティングをよく学ぶ必要があるぞ」と教えた。その神はスサ神の能力を自分の社でも使えると判じたように強く就職を勧められたのだが、スサ神はまだ自分が神見習いの身分であることを理由に丁寧に辞退した。

その他、学問の神は「よく学べ」と説き、神仏習合の神は「仏を敬え」と教え、もと人間で遊女だったという神は「恋をして良き伴侶を見つけよ」と勧めた。鰐神について海の世界ものぞいてみだし、峠の神・山の女神・各所の氏神などの所でも宿を借りた。もちろん受け入れてくれた神ばかりではなく、格式の高い神社や、はやっている神社ではあえなく門前払いされることもあった。反対に、スサ神の遊行の志をよしとし、次に会うべき神に向けて紹介状を書いてくれる神もあった。

さて、スサ神の波乱に富み、かつ稔りも多い神々歴訪の旅は、結局長々と一年以上にも及

んだ。危機も何度か味わったが、それ以上に諸神から学んだことは多く、次々にご馳走を腹に詰め込んで消化しきれないような気分になった。でもその一方では、スサ神はこの歴訪により、結局誰かを真似るのでなく、与えられた資質をもとにして自分らしく成長していくのがよいと賢明にも悟ったのである。

長旅を終えてもとの社にもどってみると、当然のことながら社前は閑散としていて雑草が伸び放題、ゴミも散らかっていた。社の体裁はなお保たれていたものの雨風に打たれて古び、一部は壊れていた。それでも我が家に帰ったような懐かしさをおぼえながら、スサ神はまた身体を縮めて祠の中に収まった。そしてたまに訪れる人の心を読んでみると、長い留守の間にはロコミやSNSで、「あの神さんに拝んでもまったくムダ、効き目ゼロ」、「ワラジムシを拝むほうがマシ」、「賽銭泥棒！」などとひどい非難、中傷が出回ったらしい。でもスサ神は、そうして信者に見放されたようでも落胆も絶望もせず、元氣いっぱいだった。軽自動車が新型のSUV車に変身したように、自身の神力は以前よりもだいぶパワーアップ、バージョンアップしたような気がしていたのである。

スサ神は十分な休息をとった後、ころを見はからい、おもむろに「新装開店」した。「新装」とは、形ではなく、心や方針のほうを改めたという意味だ。どういうことかというところ、スサ神は、今後は拝みに来る人々の欲深い願いはすべて却下してほんとうに切実な願いだけを聞き入れようと心に決めたのだ。そうすることで、いたずらにバブルのようなブームに襲われて疲労困憊することもなく、また近隣の神々に迷惑をかけることもなく、神としての役目を果たせるだろう。それに、遊行中ある神に教えられたように、安易に願いを聴き入れるのは自らの努力を怠ることにつながり、みだりに神頼みの心を助長するので本人のためにもよくない。

雨の日曜日の午後、一部が壊れた黄色い傘をさして前に立った十歳くらいの男の子が手を合わせてもぞもぞとつぶやいた。

「ぼくのウチはお金がないのであまり食べ物を買えません。食べ物をもっと買えるようにしてください。お母さんの身体も丈夫にしてあげてください」

男の子を見つめると、スサ神には瞬時に、その子が近所の狭いアパートの部屋に母親と姉と三人で暮らし、母親はパートに出ているが病身で休む日も多いことなどが読みとれた。男の子が去ってからしばらく、スサ神は算段を考えた。母親の健康を三〇パーセント増しにして、収入も三〇パーセント増しにするのはできないことではないだろう。でも一時的にそうできて、持続可能だろうか？

そこでスサ神はある見当をつけてすぐにそのアパートに出かけてみた。母親が青白い顔をして蒲団に横たわっていた。そして案の定、台所の隅の方に人間の四歳児ほどの背丈の灰色つばい神を見つけた。貧乏神だ。スサ神は神デビューする前に、この国では近年経済が衰えて貧乏神がはびこっていると聞いていたが、実際に面と向かうのは初めてだった。学校で

習ったように、なるほど貧乏神は目が窪んであごがしゃくれ、髪はぼさぼさ、継ぎ接ぎの着物を着ているが、だいぶ小柄だ。

スサ神は早速自分を名乗って、貧乏神にこの家から退去してくれるよう頼んだ。小粒な目の弱々しそうな貧乏神は真正面から挑んでくるスサ神の勢いに恐れをなし、脇に目をそらして神語でぐじゅぐじゅとつぶやいた。つまり、

「そんなふう我突然言われても、ワシには行く所がない。あんたがどこか住みやすい所をあっせんしてくれるなら話は別じゃが」

ここはぐずるのが得策と考えたらしい貧乏神に、スサ神は、

「わかりました。ではどこかあなたのいい転居先を探して、また来ますから」といったん引き下がった。

どこか貧乏神の引き取り先を探さなければならない。近所の知り合いの神々に相談してみたが、どこでも嫌な顔をして断られた。それも道理で、貧乏神はあまり気分のいい同居神ではないし、また神々ですら同居が自分の営業にさしさわるのを怖れるのだ。

一週間もたつて、スサ神があてもなく町の上空を徘徊していた時、ふと丘の上にそびえ立つ城のような洋館が目に入った。ある直観がはたらいたので、そこに降りていってみたい邸内を探り立派な台所の間に入っていくと、やはりガス台の上でカマド神が昼寝をしていた。台所が近代化され、カマドというものがとくに台所から消えてからも、カマド神はなんとなく居心地悪そうにしながらもたいていガス台や水回りのあたりにわだかまっていた。その太ったオバサンのカマド神に、スサ神は挨拶して来訪の理由を話した。そしてダメ元で貧乏神の引き取りを願ってみた。すると、飛び出た目でじっとスサ神を見まもっていたカマド神は、

「わかった。そいつはウチが引き受けたげるさかい」と幸いにもうけがってくれた。それから、

「あんた、若いのに人助けに骨折ってなかなかエライなあ。今どきかんしん、かんしん。そこが気にいったわ。まあこの家の主は、ウチもだいぶ助けてやったんじゃが、投資でだいぶ稼ぎはったんじゃ。不労所得ちゅうやつちやな。県会議員とかをして、賄賂もたんまり取つとる。ちーつとくらい財産減らしたつてもどうちゅうことない。いつでもええから、そいつを寄越したり」

関西弁(ただし神語)の太っ腹なカマド神にスサ神は心から礼を言って、善は急げ、その足で前のアパートの部屋に回り、なおぐじゅぐじゅと云っている貧乏神を引き連れて洋館に取って返した。カマド神にパンと背中を叩かれた貧乏神は怯えた犬のようにくしゅんとなつて台所の隅にしゃがんだ。スサ神はこうして貧乏神を追い払ったうえに、お母さんの健康を三〇パーセント増しにもしてやった。しばらくたつて見に行くと、やはりつつましい部屋ではあったが、だいぶ元気を回復してよく働けるようになったお母さんと子供たちが楽

しそうに食卓を囲んでいた。

この一件からスサ神は少し悟るところがあった。それは、なにか人の役に立とうとするなら、神もただじつと社の奥に鎮座したまま願いを聞くばかりでなく、頭と足を使って奔走せよということだ。

それでも、人々の切実な願いに応えようとしてもどうしたものかと困ってしまうこともあった。たとえば雨上がりの朝に、杖を突いたおじいさんが通りかかり、ふと思いついたように社前で手を合わせた。むずかしい顔をして、

「神様、こちらはどんな神様かは存じませぬが、ワシはこの世にもうなんの望みもなく、しつこい持病にも悩まされております。日々がつらいので、早くお迎えをお願いたします。できればあまり苦しまずにあの世に行きたい」とあるかなきかの声でつぶやいた。

「早くお迎えを」というのはむしろお寺さんのほうだがな、とスサ神はややいぶかりつつ、しかし神式の葬儀もあるわけだから、と思いついておじいさんの願いを受ける気になったが、さてどうしたものか。以前なら専門外としてスルーしてしまったタイプの願いではある。

このおじいさんは、少額の年金をたよりに木造の古家に一人で暮らしている。すでに妻もなく、おじいさんの狷介な性格も手伝って子供たちとも疎遠で、近所に親しい友もない。いつでも苦虫をかみつぶしたような顔をしていて、もう笑い方も忘れてしまったようだ。おじいさんの内心をのぞいてみると、怒り、猜疑、後悔、絶望、悲しみなどの負の感情が絵の具を全部混ぜたようにどす黒い渦になっている。

こいつはだいたい「早くお迎えを」といって、まさか死に神を呼んできて連れて行ってもらおうわけにもいかない。人は寿命が尽きるまで生きているのがよいのだ。スサ神は社の奥でしばらく沈黙考した。その挙句、こんな結論を捻り出した。「おじいさんの固くなつた心を三〇パーセントやわらげてやろう、そうすれば活力もいくらか出てくるはずだ」。

けれども、考えてみると、「心をやわらげる」は「力を増やす」と同じではないし、より抽象的だからうまくいくかどうかはわからない。あえて「心をやわらげる力を三〇パーセント増やす」とこじつけてみたが、だいたい無理がある。

だいたい、人の個人的な願いにはさまざまあるが、中で最も対処が難しいのはその人の性格を変えることだと、すでに多様な願いに応じてきたスサ神は知っている。人の性格というのは長い間に心の中にできた岩盤のようなものだから、たとえば、思春期の女の子が、「私はもっと明るい性格になりたいです」と願ってきても、電気のワット数を増やすように三〇パーセント明るくしてやる、というわけにはいかない。せいぜい、その女の子の現在の具体的な悩みを読みとって、それをいくらか軽減、緩和してやるくらいしかできないのだ。

「心をやわらげる」は、「性格を変える」にやや近いからむずかしいが、でもより状況依存的ではあるから、岩盤を穿つのは無理でも積もった小石をどけるくらいはできるかもしれない。

スサ神はなお首を捻りながらもおじいさんの部屋に出かけ、むずかしい顔をして寝ているおじいさんにあちこちからウルトラマンビームを送ってみた。すると、案ずるより産むがやすし、次に社に来て手を合わせたおじいさんは、

「こちらの神様のおかげかどうかはわからんが、なにかだいぶ気持ちが悪くなったような気がします」と言っただけおじいさんを見せた。

人というものはややこしい生き物なのだ、と若いながらにスサ神はつくづくと思う。人はこの世でわがもの顔にふるまっているようでも、一人一人の心の中をのぞいてみるとかならず悩み苦しみを抱えている。それがまったく人間などいない。その悩み苦しみに、小は顔のニキビ一つから大は自殺しようかというのまでさまざまにあるが、結局それらすべて自分の欲心から起こっているのではないか、とスサ神はこのごろ考えるようになった。宗旨はちがうが、二千五百年も前にあのお釈迦様が看破したとおりだ。「欲心から苦しみが生じる。苦しみを離れるためには欲心から離れよ」。少しちがっているかもしれないが、まあ。まあ、神にだって欲心は十分にある。そして神の欲望は人間の欲望に似通っていてもいるが、ただ姿を隠している分だけ現われにくい。

一つの応用問題が解けたようになんとかおじいさんの心を少し楽にできて、スサ神は自分の能力の幅が広がったように感じた。これも遊行の成果なのかもしれない。

人の悩み苦しみに耳を傾けていると、「心をやわらげる」効用はかなり汎用的である。それはたとえば、

「神様、神様、私は毎日が大変苦しいです。何度も自殺しようと考えました。どうか、夫の悪い酒癖を直してください。酔って私を殴るのを止めさせてください。幼い子供たちのためにも、どうかどうか」と深く身体を折り曲げて手を合わせた三十代の女の、一見解決のむずかしそうな悩みにも適用できた。スサ神はその願った女の方ではなく、女の夫のほうの心をやわらげてやったのだ。その男の心の中にはやはり長年溜め込んだ世の中や肉親に対する憎悪や怒りが汚物のようにとどろをまいていた。あまりにそれらが鬱積しているので、スサ神の力でもやっと一五パーセント少々しか「心をやわらげる」ことはできなかったが、それでも妻の顔にはいくらか明るさが戻った。

いじめられて悩んでいる少年少女にも、「心をやわらげる」は適用できた。いじめられて悲しい子供が来て手を合わせれば、スサ神はいじめられている子供のところに行ってその心をやわらげてやった。

暑気がようやく去って社のあたりにも心地よい風が渡るようになった。早いものでスサ神がこの地に神デビューしてから、遊行期間も含めてもう二年ほどがたとうとしていた。その間にいろいろと経験を積み、神として一人前に近づいたような気がした。でも神界からはいまだなんの連絡もないから、試用期間はまだ続くだらう。大昔、あの山幸彦の神は海神の宮に三年、丹後にまします浦島明神も人間であった時龍宮城に三年留まったわけだから、自

分もまだしばらくは放って置かれるのかもしれない。

二年ほどの間には神修行が進んだだけでなく、スサ神の身体も大いに变化した。いつの間にか大きく、たくましくなっている。若い神は犬と同じように人間の五倍速で成長するので、それも自然だった。自分の顔を水鏡に映してみるともう子供らしい感じは消えて、濃い鬚が生え、青年らしくなっている。そして青年らしい悩みも生じてきた。以前にはなかったことだが、時々腰のあたりが変にムズムズして胸苦しくなるのだ。拝みに来たのが若い女だとなぜか気恥ずかしく、それでもつい社の奥からじろじろながめてしまう。男の神と女の人が結ぶのは、「巫女は神の嫁」などとも言われるように昔からあることだが、所詮は類がちがうのでうまくいったためしはあまりない。「結婚するにも人間だけはやめておけ」という格言も神界にはあるくらいだ。それでスサ神も人間の女には手を出さず、そのつもりもなかったが、しかしムズムズには困った。

そこでスサ神は遊行の時に親しくなった、西の方の町に住む先輩の神のもとに出かけて行って相談してみた。その神もまだ若い、もう美しい女神と結婚し、五柱も子供をもうけてにぎやかに家族を営んでいる。

先輩の神はスサ神が言いにくそうに持ち出した悩みを聞くなり、

「それは君ももう大人になったということだな。自然なことだから何も恥じることはない。わかった、わかった。私に任せておきなさい。ちょうど大川のほとりの社に素性もよいきれいな若い女神がいる。まだ独身で手つかずだ。すぐに紹介してあげよう」とうけがってくれた。幸い先輩の神は、縁結びも商売のメニューに入れていただけあって神々の縁結びにも詳しいようだ。

だが、川のほとりの女神は、会ってみるとまったくスサ神の気に入らなかった。たしかにきれいにはちがいないが、自分の容貌や出自を鼻にかけ、高慢ちきで、スサ神は会っている間じゅう見下されている気がして不快だった。それに、

「人間というのは神とは素性がちがって猿から出てきたものよ。だから猿に毛が生えてるだけ（いや、毛はほとんどなくなった）の生き物よ」と、ハナから人間をバカにしている点も考えが合わなかった。スサ神は見合いの後すぐに先輩の神にはっきり断りを申し入れた。後で女神のほうでは満更でもなかったようだと言ったが、気にしなかった。

親切な先輩の神はそれから近くや遠くの女神を三柱、四柱と紹介してくれたが、スサ神が気に入らなかつたり先方から断られてしまつたりでうまくいかなかった。やっぱ神の場合でも結婚というものは難しいものだ、とスサ神はため息をついた。それには構造的な問題もあるんだ、と先輩の神が教えてくれた。昔に比べて神の数が激減し、しかも人間界と同じで高齢化が進んでいる。若い神の数が絶対的に少なく、出会いや求婚の機会が減つただけだ。そんなことも聞かされ、スサ神は結婚をなかなばあきらめかけた。

ところが、である。ある夜くさくさした気分を払おうと、人間の青年がバイクをぶっ飛ば

すように大空を疾駆していた時、町の灯でわずかに明るんでいる向こうの空の中にふわりと浮かんでいる若い女神を見つけた。その優雅な姿に惹かれ、近づいて声をかけようとする、女神は小さく叫び、急いで背を向けて飛び去った。こういう場合に女神がまず拒否するのは昔からの習わしなので、スサ神は次の夜にも期待してその場所に出かけてみた。すると女神は昨夜と同じように浮かび、スサ神に気づくと今度はにっこり笑いかけた。でもまた身をひるがえし、追いかけてこなくなった。数晩同じようなことをくり返し、結局七晩目によりやく雲の上で互いに微笑みながら向き合った。女神の名はアカルヒメ、聞けば偶然にもスサ神が遊行の時に訪れたある大社の大神の何番目の娘だった。女神は飛び抜けて美しくはないがかわいらしく、神柄がよさそうだった。話しはじめると両神はたちまち意気投合して、いろいろしゃべりあいながら明け方近くまでいっしょに夜空を翔けた。そして再会を約した。

思い描いていた通りの女神と恋に落ちて、スサ神は有頂天になった。何回かデートした後のある夜、スサ神はアカルヒメの寝所に出かけていった。幸い恐そうな親の大神には見つからずにすんだが——しかしじつは大神はその神通力ですべてお見通しだったのだ——、次の夜に通っていくと、大神が鋭い剣を提げて寝所の前で待ち受けていた。スサ神は神話の火の神のようにその剣で切り刻まれるのかと震え上がったが、そうではなく、剣は寝所の邪気払いのためで、大神は二柱の結婚を許してくれたのだった。ただ、「わけもなくわが愛娘を捨てるようなことがあったら、この剣の威力を思い知らせてやる」と脅されもした。以来、スサ神はしきたり通り、夜ごとにアカルヒメのもとに通った。

若いスサ神の一番の悩みだった結婚問題はそれで決着がついた。かわいくて聡明な女神を得てスサ神は満たされ、また一つ大人になった。それでスサ神は、わが恋狂いのために少しくなおざりになっていた神としての営業にまた精出すようになった。自分が経験したおかげで、一つ男女関係という抽斗が充実した。

願いがよく叶うというので、ふたたびスサ神人気が急騰しそうになったが、もうその対策はよくわかっていた。そのため今回のスサ神ブームは静かなものになり、無用な騒ぎは回避できた。公私とも順調な日々が続き、気持ちにも余裕ができた。

スサ神の社も、はやっている商店がこぎれいになるように、小さいとはいえさらに整ってきた。まあ、スサ神自身は見てくれなどまったく気にしないタイプで、営業ができさえすればそれで十分だったのだが、願いが叶えられた人々が「報謝」や「ご奉仕」といって整地をし、玉砂利を敷き、樹木の苗を植え、小ぶりの鳥居や狛犬も据えてくれた。社の屋根には少し安っぽい鯉木や千木まで載せられた。スサ神もそんなわが社の整いには満更でもなく、ある日ちよつと恥ずかしがりながらアカルヒメも招いてみた。ヒメは「わあ、こじんまりしていてステキじゃない」と言っておもしろそうに身体を縮めて祠の中に入ったらしい。

ところが、塞翁が馬、晴天の霹靂、いや寝耳に水、しばらくすると、思いもよらぬところ

から異変が出来し、人の願いを聞くどころか、スサ神自身が存亡の危機に陥った。

というのは、その土地に突如マンション建設計画が降ってわいたのである。ある日数人の男たちが車でやって来て、草を踏みながらあちこち動いて土地を計測したり、周囲の状況を調べたりしはじめた。その草原の片隅にスサ神の社がある。そばで地主らしき老人と、でっぷり太ったスーツの男のこんな会話が聞こえた。

「問題はこのお社ですな。どこかへ移転してもらわなあきまへんなあ」

「いやいや専務さん、ここはですな、もとは草の中に古びた石ころが一つころがっていただけだったんですわ。近ごろ急にこんなふうになっただけですよ。なにかちよつとご利益があるとかで、近所の物好きがこんなふうにならなく仕立てたようです。一時期は妙な人気が出ましてな、お参りの行列までできたんですがな。まあ、遊園地のアトラクションの一つみたいなものやから、私も気にせず放っておきました。マンション建設には邪魔でっしゃろ。どうぞ気にせんで撤去なさってください」

「はあ、いやしかし、気にせんでと言われましても、いちおうはお社ですからなあ。近くの神主さんに拜んでいただいて撤去するか、どこかへ移っていただくかしまへんと……」

「いやいや、冗談でこさえたようなもんですから、ここに神様なんぞおるはずはありません。しち面倒なことは必要ありまへんわ。ちよつと重機を入れてお払い箱にしたらええんです。いや、でも、なんでしたらそれくらい、本契約の前に私のほうでやっておきまひよか？」

「ええ、はい、まあ、そうしてくださいと当方としては大変助かります。でも後で、変なタタリなどはないでしょうなあ」

そばで聞いていたスサ神の顔はたちまち発火した。「神様なんぞおるはずはない」だと？ れつきとした自分がいるではないか。自分はまだ神見習いの身分ながら、修行を積み、結婚もして、もうすぐ一人前になれるのだ。それからスサ神は人間の傲慢さにも我慢がならなかった。神界の学校でもくり返し教えられた通り、そもそも土地というものは太古の昔から全生物の住処であって、いわば全生物の共有財産なのだ。その管理者として神がいる。なのに人間は土地をさも自分たちの占有物であるかのように勘違いして、勝手にしてよいと、また金で売買できると考えている。そのこと自体が笑止千万である、バカバカしい、天下の悪習だ、腹立たしい！

と芯から怒ってみても、さしあたりスサ神にはどうしようもなかった。こと土地問題をめぐっては、神と人とは人間が開発というものを始めた久しい以前にだいたい力関係が逆転してしまったので、人間の都合で神が住地を追い払われたり移されたりするのは、だから日常茶飯のこと、神の側はぶつぶつ不満を言いながらも運命に従うしかないのである。

それでもすぐには納得しかねたスサ神は、急いで隣の市の大神のもとに陳情に行ってみた。三日待ったが、使者の神から「それはなんともいたしかねる」というそっけない返答が返ってきたのみだった。夜にはアカルヒメにも相談してみた。するとアカルヒメは、

「あなたの力を使ってみたら？」と即座に答えた。

「ぼくの力って？」

「ほら、人の持っているいろいろな力を三〇パーセント増やすってやつよ」

「それはいちおうぼくも考えてみたよ。あの地主の男の金銭欲を減らせばなんとかなるかもしれない。そうできれば、べつに今すぐ金もうけのためにあの土地を売らなくてもいいと思いき直すかもしれない。でもダメだよ。ぼくは人間の力を増やすことはできても、減らすことはできないんだから」

「それはね、やり方しだいよ。「もっと金もうけしたい」の反対は「もう金もうけしたくない」でしょ。もしその人の心の中に「もう金もうけしたくない」という気持ちがあったら、「金もうけしない力」もあるはずでしょ。それを三〇パーセント増やしてやるのよ」

「うん。でもそんな「もう金もうけしたくない」なんていう殊勝な思いを人間が、あの地主の男が、心の中に持つてるかなあ。疑問だなあ。ちつとも持つてないと思うけどなあ」

「喉が渴いた時、水を飲むでしょ。コップに一杯飲むでしょ。とてもおいしい。それで二杯目、三杯目と飲んでいくとおいしさがだんだん減ってきて、最後にはもつとやると言われてももう要らないでしょ。これ、経済学で限界効用逓減の法則っていうのよ。いくら人間でも際限のない欲望なんてないと思うわ」

「まあ、それもそうだなあ。やってみようかなあ」とは答えたものの、ササ神はまだ半信半疑だった。自分の能力を逆手に取るような仕方を思いつくアカルヒメの頭のよさには感心したが、人間の欲深さを思うとあまり奏功するとは思えなかった。水の話と金の話ではやっぱりちがうのではないか。

とはいうものの、少しでも可能性があるならと、ササ神は地主の男を探した。その住所は神ながらの嗅覚であまり苦勞もせず探して当てられた。

広い敷地の立派な和風建築の家に男は妻と二人で暮らしていた。広々した庭には大きな池があつて錦鯉たちが悠然と泳いでいる。だいぶ投資したらしいみごとな石組みや盆栽のコレクションがある。玄関や客間にも見るからに高価そうな絵画や置物を飾つてある。不動産関係の商売で成功して裕福に暮らしているらしい。

けれども、夜も更けて大きなテレビ画面を前にして晩酌片手にふかふかのソファに坐っている男の心を読むと、意外にもあまり幸福そうではなかった。なぜだか男の心はかさつき乾いている。さらに奥のほうを読みとつていくと、なんと「もう金もうけなんか心煩わすのはうんざりや。ご免こうむりたい」という気持ちのかけらが落ちていたのを発見してササ神は驚いた。「自分は裸一貫で身を起こして、人の四倍も五倍も働いてこうして財を成した。でもここまで来て、この寂しさむなしさはいったい何なんや？ 儲けるために他人を蹴落したり裏切ったりしてきたからか？ オレに頭を下げてくる人間は今でもいっぱいおるが、その中にほんとうにオレを敬っている人間なんぞ一人もおらん。家族さえもそうや。

ああ、寂しい人生や、むなし人生や」などとも思っている。持てる者にも悩みはあるのだ。それならやりやすいと、スサ神は渾身の力を込めて男にビームを送った。

効果はテキメンだった。いや、テキメンを通り越して効きすぎてしまった。一晩考えに沈んだ男は、翌朝一目散に市役所に向けこみ、その駅近の土地を保育所用地として市に寄付する旨、申し入れてしまったのである。市役所から出てきた男の顔は晴れ晴れとしていた。

誰も予想しなかった男の突然の仏心の發揮に、やり手の若き市長をいたたく市役所の対応は早かった。もともとその地区に不足している保育所の候補地として数年前から地主の男に市としての購入を申し入れていたのだが、価格が安すぎるとして応じてもらえなかったというそれまでのいきさつがあった。すみやかに手続きが完了して、一カ月後にはもう整地が始まる段取りとなった。

スサ神は困った。保育所が建設されるならやっぱり自分の社は撤去されるだろう。でも自分の働きの多くの人々の幸せに役だつ結果になったようだと気分は悪くなかった。アカルヒメと同居するのはまだ早すぎるし、試用の分際で他の社を要求するのもはばかられるから、まあしばらくはまたどこかに遊行しようかと心に決めた。しかし今度の場合、不安は大きかった。遊行神といえは聞こえはよいようだが、じっさいには多くは宿なしの浮浪神にほかならない。追い出されて浮浪の身となった神々の実情は哀れそのもので、長い間の浮浪生活の果てに人知れず（いや、神知れず）行倒れや行方不明になってしまう者が多い。またこそそと人の家屋に侵入して貧乏神に落ちぶれたり、その貧乏神にすらなれなかったりする。スサ神は前に出会ったあの貧乏神の貧相な面相や姿を思い浮かべ、身震いした。

けれども、ひと月ほどたつて、明日はいよいよ重機を入れて整地が始まるうというまさにその夜に、見計らったようにスサ神の運命が急転回した。月の明るい夜、彼の頭にテレパシ―で神界から指令が送られてきたのだ。その内容の要点は人語に直すと次のごとし。

【本日をもって貴神の見習い期間は終了とする。ついては、

- ① 仕事じまいをして、三日以内に神界に帰還すべし。
- ② 帰還後一カ月以内に、「見習い期間に携わった事業の成果と反省、および実体験を通じて見た現代人間文明の考察、および不信仰時代における神の役割について」という題目のレポートを仕上げ提出せよ。この場合、生成AIの利用は厳禁する。もし利用が発覚した場合は永遠の追放処分とする。字数枚数制限は特に定めない。

③ 当該レポートの提出後、日を置かず試験官による口頭試問を行うので準備せよ。そのレポートと口頭試問とを以て貴神の神資格についての最終試験とする】

地上に棲息する神々にとつて、異次元に住まっている大神たちの指令は絶対である。しかも浮浪する運命にあったスサ神にはまったく都合良かった。長かったような短かったような試用期間もいよいよ終わったのだ、という感慨をおぼえた。たいそうな題目のレポートや口頭試問は骨が折れそうだが、正式の神になろうとするほどの者なら誰もが通過しなければ

ばならない関門であって、まあ人間界という卒業試験、就職試験のようなもの、自分にもできないことはあるまい、なんとかなるだろう。スサ神の心は当座の悩みから解放されてとたんに軽くなつた。軽くなつたが、でもすぐまた別の不安がのど元を突き上げるように襲ってきた。それは、「これでアカルヒメとは永遠の別れとなつてしまふかもしれない」という切ない思いだ。

最終試験に合格して晴れて正式の神になれたとしても、またこの地へ戻つてこられる保証はまったくくない。仏教・キリスト教・イスラム教などの普遍宗教とはちがつて日本神道は民族宗教だから(と学校で習つた)、「赴任」地はまず国内のどこかにまちがいなかるうが、この国もそれなりに広いのだからその「どこか」が問題だ。古くからのしきたりで地上の神々の多くは土地に縄張りを持ち、逆に言えば土地にしばりつけられている。だから「遠距離恋愛」はまず無理、そうでなくても、魅力的でこれからがまさに女盛りのアカルヒメのことだから、自分が去つた後求愛する神はきつとわんさと出てきて、やがて誰かほかの男神とくつついてしまうだろう。

などなど、その夜の間にじゆう、スサ神は珍しくマイナス思考にとらわれてしまつて悶々とした。けれども夜が明け白み、あたりに清浄な大気が満ちるとともに若き神候補者らしく決意が兆した。「ええい、レットイットビーだ。最大限努力を尽くした末にそうなつてしまうならそれも運命というもの、置かれた新天地でがんばればよい」。するとまたいくらか爽快な気分が戻つてきた。

いつものように早朝からぼつぼつ参拝者が訪れ始め、スサ神は今日が仕事納めの日だとあらたまつた思いで真摯に対応した。九時になる前に工事関係者がやつてきた。トレーラーで運ばれてきた重機が草地に侵入してきて早速土を掘り返しにかかった。この分では今日明日のうちにもわが社は取り壊され、撤去されるだろうと見定めてからスサ神は祠を去り、少しなごり惜しそうにゆつくりその上を旋回した。

それからアカルヒメのもとに翔けていった。神殿でなにかの本を読んでいたヒメに急展開したわが事情を語り、決意を告げた。いわば一方的に離婚を申し渡すに等しいわけだから、泣き叫び、猛り狂つて暴力を振るわれてもおかしくないシチュエーションだ。でも賢明なヒメは、ひとしきりスサ神の肩に顔を埋め声を上げて泣いた後、無理にも明るい顔を作つて、「いよいよ来るべきものが来たのね。私もなんとなく覚悟はしていたわ。最終試験、がんばってください。地上から応援してるからね。あなたは三〇パーセントの神、めつたにないすばらしい能力をお持ちなのだから、かならず合格して、それを世のため人のために生かしてね」と激励してくれた。そして最後の抱擁の後には、ポンとスサ神の肩を叩いて、

「またきつと会えるわよ。そうよ、同じ星の同じ島国の中なんだから。帰ってきたらあなた、あのご先祖のイザナキ・イザナミの命に倣つて(アタシね、今ちようど「古事記」を再読してたところなの。おもしろい。もう四十八回目よ)、子孫繁栄、子作りに励みましようね」

と冗談めかして言って涙ながらに笑顔で送り出してくれた。なんとしてもこのヒメを失いたくないものだ、このヒメのために最終試験をがんばって何とかしてここへ、ヒメのもとへ戻ってこようとスサ神は勇んだ。

去る前に、ちようど医院を閉じる医者がクライアントを方々に処置するように、スサ神も懸案中また経過観察中の信者たちをできるだけケアしておく必要があった。近くの神々を飛び廻って離任の挨拶がてら信者を引き受けてくれるよう頼み入れ、一方信者たちのもとへも出かけて頭の中を他の神々へ仕向ける仕事に丸二日かかった。そうしておけばあとは信者しだい、他の神社へ行くもよし、神頼みを止めるもよし。最後に隣の市の大神にも離任の挨拶に行った。

へとへとになって午後、もとの場所に舞い戻ってみると案の定もう社はきれいさっぱりと消え、地面は土色の更地が変わっていた。やがてそこに保育所が建ち、そこで幼子たちが笑ったり泣いたり遊びまわったりして育っていく姿が容易に想像できた。

では、さあ久しぶりに神界に帰ろう、と踵を返そうとしたとき、もと社があったあたりのそばに子供が一人立ち止まって手を合わせていた。赤いランドセルの女の子、あの信者第一号の女の子だった。あれからも登下校途中にたびたび立ち寄ってくれた女の子は、初めのころよりもだいぶ手足が伸び背も高くなっている。近づいて心を読んでみると、相変わらず勉強についての悩みはあるようだが、でも前よりはたくましくなり、世界も広がっている。女の子は消えてしまった社にまた自分の学力向上を願っているではなかった。スサ神にありがとうとお礼を言っていたのだ。スサ神は女の子がたまらなくいとおしくなり、ふとまた三〇パーセント成績を上げてやろうかと考えたが、それはやめた。代わりにお礼のビームを送った。女の子は輝くような笑みを浮かべ、去っていった。